

セイロン・デワフワ地区派遣専門家報告書

海外技術協力事業団

農業協力部

JICA
120
807
AF
BRARY

Alwakuwa 計画の推移

1 堀江（かんがい担当）と佐々木（農民組織）両専門家が
Ceylon に派遣され、現地で活動を開始した昭和44年11
月中旬から算えて今日まで1年4ヶ月の時間が経過した。そ
の間、佐藤（水稲 リーター）が昭和45年1月下旬に 福
島（Co-ordinator）専門家が同年12月初め それぞれ 参
加し 佐々木は12月末1時帰国した。

この1/3年という期間は大きく次のように3区分されるかと思
う。

第1期 = 昭和44年11月中旬 → 昭和45年5月末

（日本人専門家の現地到着時から 第七回総選挙の
結果セナナセケ政権の下 まで）

第2期 = 昭和45年6月 → 昭和45年10月18日

（バンダラナイケ政府発足から Alwakuwa の協定
調印まで）

第3期 = 昭和45年10月19日 → 現在まで

JICA LIBRARY



1026748121

(1)

国際協力事業団	
受入 月日 '84. 3. 12	120
登録No. 00145	80.7
	AF

この3時期のうち 第2期間は日本人専門家による具体的活動はセ側によって敬遠されていた。しかし そのことは必ずしも日本人専門家団が手をこまねいて いたずらに事態の推移を見送っていたことを意味しない。

これら3時期のそれぞれにおける日本人専門家の活動と、それによる *de-wakuwa* 計画の進捗状況をかいつまんで報告すれば、大体以下のようなだろう。

第1期 = これは“協定前活動期間”でセ側が *Phase I* と呼んでいたものに相当する。

この間の日本人専門家の努力が、協定締結直後の1970-71年 *Maha* 期に入って 目すべき実績があげられるための土台を築いたものと言えよう。

第1期における計画遂行事情と、その実績については その間毎月 *TCA宛* に送られた業務報告書に詳しいが それらを集約的に述べたものとして昭和45年6 7 8月合併業務報告書続編がある。そこでは この期間における事業の進展が、対セ側との関係から生じた障害の面と、それにもか

かかわらず積み上げられた実績の面という二つの面からとらえられている。以下はその抜すいである。

④.“ 1969年11月中旬からはじまり 本年(1970年)5月末の(第7回)総送拳を境として本計画が“棚あげ状態”になるまでの半年間 計画遂行にあたり困難とされた問題点、専門家側からするその打開策 それに対するセ側の態度等については すでにDTCA宛送付済みの *Shewakuwa* 計画にかんする業務報告書(69年11月、12月 70年1月 2月、3月 4月 5月の計7篇)に述べてあるが この間計画遂行上の問題点、その打開策といった件をめぐって 25回以上の会議や打合せをセ側との間に持ってきた。そのうち、とくに矛盾点が集中的に問題とされたもの8回に及ぶ。これらの会議で決定された事項がどの程度まで履行されたかをふりかえってみれば 問題の原因の所在がつきとめられる筈と考えられる。

(各会議の日時 場所 出席者、主要議題別一覧表と それぞれの会議で検討された主要問題点 その結論 決定事

項の履行状況 それに対する日本人 Teamの動きは省略)

④ 以上8回にわたる重要会議でとりあげられた問題は、件数で23 同一項目で2つ以上の事項を含むものもあったから全部では28となる勘定になる。

さて そのうち全面的に解決されたもの / なかば解決されたもの 6 という惨めな成績にとどまっている。本計画が日セ協力事業である以上 何事につけても双方のあいだの会議で決め、双方がその決定を尊重し合っていかなければ進まぬことは当然である。結果的に打合事項28のうち実現をみたものが 1/4 以下であったことは注目に値する。その原因・理由をつきとめるため まず28項目を問題別に / の区分して それぞれにつき履行成績を検討して見る

<u>問題区分</u>	<u>問題点</u>	<u>成績</u>
1) 道路補修	5項目	全部未履行
2) 建築関係	4 "	1のみ解決
3) かんがい排水工事	2 "	1のみ半履行
4) 高圧送電線工事	1 "	未履行
5) 計画用資機械	2 "	1のみ半履行
6) 援助物資	4 "	1 " "
7) 青年協力隊	1 "	未解決
8) 計画管理機構	1 "	"
9) セイロノ側人事	4 "	3件半履行
10) 計画遂行上の戦略戦術	4 "	全部未成立

① 問題区分で困難性の大きかったものから順に拾いあげていくと、項目数で5、履行率ゼロの“道路補修”が第1、項目数で4、全部未成立の“計画遂行上の戦略・戦術”が第2。項目数では同じく4と高いが 半ば解決されたものが1ある。“援助物資”がある。項目数で4、解決済み1の“建築関係”が第4。項目数4、半ば解決済み3の

“セ側人事”が第5の順になる。

ところで これら5のうち “道路補修” “建築関係”
の2つは純粋に *dewahuwa Project* フロパーの予算が
ついていなかったことによる。

ついで “計画遂行上の戦略 戦術”や“セ側人事”は、
関係各省 各局間の協力関係が充分でなかったこと、

dewahuwa 計画の究極目標についての認識と決意が不充
分であったからと思考され、主要原因は *Joint Committee*
の未編成と *Project director* の識見・力量不足とにあ
る。

最後に、“援助物資”問題 シツカリした *Joint Commi-
tee* と *Joint Comt Member* 全員に信頼された実力者が
Project Director であったとしたら 半ば以上解決されて
いたであろう。

以上をさうじで見ていると、諸問題の根本原因は ①予算(現
地通貨予算)、② *Joint Committee*、③ *Project director*
の3要素が不備・不満足であったことに帰着する。しかし

これも総選挙前の異常時期に、正式協定なしの協力事業を進めねばならなかったことから考えてみれば、強くセ側を責めることは出来ない。

⑤ では、こうしたハンディキャップのもとで *dewakuwa* 計画自体はどのような進捗状況をみせたか？

① 事業の推進に当たっている3専門家の一致した考え方は、本計画はそれぞれ独自の運動と目的をもったいくつかの農業開発 *Scheme* が互いに他を助けることによって、自らの効果を増幅できるように、有機的に総合されたところの1種の *Package Program* である。したがって作業分野としては ④土地基盤整備 ⑤営農 ⑥組織 と別れているようではあっても、実はこれら3が互いに手をとって進められねばならない。というものであった。

期 間	A 土地基盤 建築	B 営 農	C 組 織
<p>1969→ 1970年 Maha期 (第1段 階)</p>	<p>用水量調査 用水系 統調査等 Water- Controlに必要な基 礎データの収集 道路補修 建築関係 等緊急を要するもの から工事をはじめて いく。 Water-Controlに ついては施設の状態 に応じてできるだけ 合理化する</p>	<p>水稻耕作方法やその 結果につき“観察” を行なう。</p>	<p>農民組織(協同組合 と耕作委員会)の組 織替え 活動体制整 備を通じて1969 -70年 Maha耕作 に貢献せしめるとと もに、計画高度化に 備える。</p>
<p>1970年 Yala期 (第2段 階)</p>	<p>本格的かんがい排水 工事その他に着手す る。 Water-Controlに ついては施設の状態 に応じてできるだけ 合理化する。タンク 貯水量の計画的使用 を指導する。</p>	<p>Yala期の水稻観察 1970-71年 Maha 期にも計画的な作付 け 栽培基準 管理 適切な Water Control 適期収穫等を指導す る。</p>	<p>農閑期利用で底辺農 民の教育 啓蒙 機械化集団耕作 土 地基盤整備等に協力 させるため青年(男 子)組織の結成 とりあえず Hand Tractorにかんする 訓練を青年(男子) 組織員に与える。</p>

期 間	A 土地基盤 建築	B 営 農	C. 組 織
1970 -71年 Maha期 (第3段 階)	日本からの資材の到着を待つてできる所から用水改良を行なう。 Water-Control については施設の状態に応じてできるかぎり合理化する。	1969-70年 Maha期の観察をもとにして水稲栽培の本格的指導に入る。 機械化集団耕作の導入により営農指導体制を本格化 今Maha期に完成予定の Pilot Farm Mechanization Centreの運営に入り 不足分は農家の委託試験で補う。	YalaからMahaにかけて Blocking組織 Joint Farming 組織編成 生活改善のため青年(女子)組織を結成 訓練を開始

② そこで現地3専門家は表示の段階的スケジュールをつくり、69-70年 *Maha* 期、ついで1970年 *Yala* 期という二つの準備段階を経て、1970-71年 *Maha* 期から本格的計画推進体制をつくりあげ度いとの考えで共同戦線を展開してきた。

その結果 第1期中に達成されたのは 表上黒枠で囲まれた部分にとどまった。だが こうした実績も各専門家による下記のような努力によったものであることが忘れられてはならない

土地基盤整備 建築	営 農	組 織
(堀江専門家担当)	(佐藤専門家担当)	(佐々木専門家担当)
<p>昭和44年11~12月</p> <p><建築関係></p> <p>まず 17室の合同宿舎の建設をいそぎ ついで本部建物を完成させ 昭和45年10月頃までには <i>Pilot Farm</i> と <i>Mechanization Center</i> を建て上げるよう努力を開始</p> <p><かんがい 排水工事></p> <p>雨期でもあり 日本から</p>		<p>昭和44年11~12月</p> <p>農協については、先ず役員会の改選(協組と耕作委員会の組合せ方式実施) 組織の再建整備指導(会計帳簿制度の改善 週1回の在庫調査 週4.5日営業を5.5日制に、店頭陳列方法の改善等)により 69-70年 <i>Maha</i> 用水稲生産資金資材の供給を前年度の3</p>

土地基盤整備 建築	営 農	組 織
<p>の資機材未着で 本格的 工事はできないので、と りあえず 水管理と、地 区内パトロールに必要な Tracer の道路を Jeepable にするため。 その計画 見積りを Irrigation Department に提出。農民頭によって 施行可能な水路の desil- ting を行わせるべく Cultivation Court を教 育。</p>		<p>倍強にふやす。 44年ノ2月中旬より 45年3月中旬までの間 における農民教育計画を たて 全 Colonyの農協 + 耕作委員会役員合同講 習会を開催することとレ ノ2月中に2回実施。</p>
<p><u>昭和45年1月</u> 〈建 物〉 合同宿舎 屋根全部終 了 腰石垣ほゞ完了 10 室については living Roomの床、壁 1次塗 装完了。Bath Roomと 下水溝施工中 Pilot FarmとMechanization Centerをアル三月至スレ</p>	<p><u>昭和45年1月</u> 1月21日佐藤専門 家到着。1月23日→ 25日土地省 農業省 共催の特別開発計画に かんするセミナー (於 Gannoruwa In- Service Training Ins- titute) に出席。</p>	<p><u>昭和45年1月</u> 農協+耕作委員会合同 役員講習会 2回実施 地区農民による講でレ クチャー 2回にわたって地区内 農家の家庭訪問</p>

土地基盤整備 建築	営 農	組 織
<p>ート使用の簡易構造物に変更することに決定。 (かんがい・排水) <i>alewahuwa Project</i> 長期計画の大綱決定のためかん排水計画部門の打合せをセ側関係部局と続ける。 <i>Upland irrigation</i> や上水道について再検討を行なう。</p>	<p>26日 計画現場視察 27日 関係先への着任挨拶</p>	
<p>昭和45年2月 <i>alewahuwa</i> 関係建築物 <i>Maha/Yala</i> 期土木工事 <i>Galawewa</i> → <i>alewahuwa</i> 間高圧電線工事等につきセ側関係者と接渉。各種の原因、理由によりラチがあかない。 69-70年 <i>Maha</i> 農閑期における圃場水路、農道補修について住民の間には <i>Irrigation Dept.</i></p>	<p>昭和45年2月 <i>Maha-Illuppullama</i> での乾燥地帯農業全般についての包括的研究に立つて、計画地区の水田の中に <i>Observation Farm</i> (移植田下16ヶ所 撒播田下16ヶ所、計32圃場) を送定し <i>Maha</i> 水稲作の生育調査を開始。</p>	<p>昭和45年2月 前月に引続き全 <i>Clony</i> の農協+耕作委員会合同役員講習会が 69-70年 <i>Maha</i> の完成、70年 <i>Yala</i> 準備という具体的な諸問題を中心に開催(2回)されたほか、過去3ヶ月にわたる準備期間の後、地区青年組織(男子)が結成され(会員95名 正・副会長</p>

土地基盤整備 建築	営 農	組 織
<p>からの技術的指導・物的援助があれば一種の勤労奉仕で働き出す雰囲気醸成されたにもかかわらずその Estimate (見積書) に対する Irrigation Dept の承認が得られぬまま、流れてしまいまた政府の手によらねば不可能な道路 (Tract No 3 の農道と Bandaranayke Mawatha) の補修も未着工さらに 70 年 Yala 期に予定している土地基盤整備事業の主要計画については、2 月 5 日の会議の申し合せにもかかわらずいまだ正式承認されていない。</p>		<p>各 1 名 実行委員 10 名) それを母胎としたサークル活動を通じて 農民教育を一層底辺深部に浸透させ準備がすすんだ。農協については 69 70 年 Maha が後半に入ったことから、とくに生活物資供給を通ずる農民サービスの一層の向上により住民からの信頼感をもち上げ、今 Maha 産収集荷で 農協取扱量を飛躍的に増大させるべく指導</p> <p>なお 2 晩にわたり日本大使館提供の映画計 8 巻を上映 住民 700 名以上を喜ばせる。</p>
<p>昭和 45 年 3 月 〈建 築〉 昭和 44 年 9 月着工の</p>	<p>昭和 45 年 3 月 充分なかんがい水と肥料投入効果で前年比</p>	<p>昭和 45 年 3 月 昭和 44 年 12 月から定期的に開催してきた農</p>

土地基盤整備・建築	営 農	組 織
<p>17室の合同宿舎は、当初目標の12月末までに1部完成（1月中全部完了）が大巾におくれ。現況では5月一杯かかる見とおし。Mechanization Centerの建築・本部付属建物も予算がないため今予算期（昭和45年9月まで）中に建つかどうか疑問視されている。</p> <p>〈かんがい・排水〉</p> <p>予算がないとの理由で緊急に必要な道路補修工事も目立たず</p> <p>高圧電線延長問題 昭和45年度日本からの供与資機材の検討 Highlandの90コの井戸の水位 揚水量テスト。</p> <p>Channel流量調査は進行中。</p>	<p>20%以上の増収見込み Tract 12で3月下旬に入り刈取り開始</p> <p>Observation Farmも順次収穫期に入ったので 農家の刈取り日以前に3名のExtension Workersを指導して収穫をはじめ。</p> <p>なお 3月9日のセ側との会議のおり K. R 援助資機材の dewahuma 向け利用とからませて 1970年 Yala耕作に新方式を採用（“Bin-Andc” Belhuma）してはどうかとの提案を行なった。（添付コピー） 理論的には受け入れられたようだったが、総選挙前で</p>	<p>協+耕作委員会合同役員講習会を 今日からは全 Colony向けを断念し 計画地域内の農協+耕作委に絞るとともに “隣組集会”の形で底辺農民への教育計画を実施することにする。</p> <p>“隣組集会”とは 計画地区住民を7つのブロックから “隣組” (Neighbourhood Group) に分け 各ブロックの住民が1日の仕事を了えて帰宅し 日が落ちてからそのブロック内の主立た家の庭に集り いたって気楽な気持ちで彼ら自身の問題を話し合うもので その日常茶飯 毎日の耕作生活の会話のあいたに 自然に計画の趣旨の説明や dewahuma 村落開発</p>

土地基盤整備 建築	営 農	組 織
	<p>関係筋は新機軸を打ち出すことをおそれて結局 案となった。</p>	<p>のための戦略 戦術が紹介され 住民のそれへの参加意欲をもちよらせようとするもの。3月中には第1隣組から第6隣組までが集会をもち、延参加人員は男136 女47 子供125であった。</p> <p>地区男子青年組織全体会議が持たれ 40会員が集って近く日本から供与される農業機械(両輪トラクター)につきその運転 整備に35名 記憶その他 (Clerical job) につき15名が訓練を受けることに決定</p> <p>農協役員会で 69-70年 Maha 期の組合活動財務報告 70年4月→7月事業計画と資金運用計画が承認され 併せて</p>

本提案のネライは つまるところ 69/70年のおもわざる慈雨による Dewakuwa Tankの満水と、69年度実現をみたKR援助物資中 Dewakuwa 関連の部分を結びつけることにより 過去20年以上いわは飛行場を“滑走”(Tarung)のみしてきた計画地区住民 については Dewakuwa Colony 全住民に この際思い切った“離陸”(Take off)を可能ならしめ しかも従来の外部からの援助 補助にたよりきった(Spoon-feeding)のカタチによってではなく ハツキリした自助努力の裏打ちをもってこれを実行させることとし さらにKR援助物資の1部を Counterpart Fund化させることにより 独自の財源をもっていない Dewakuwa Project にたいし Pump-pumping Water (呼ぶ水)を提供しようというものである。

2 Project Directorにたいする日本人専門家チームの示唆

- ① KR援助 Dewakuwa 関連物資中 肥料等は肥料公地その他適当な機関への転売によって Rupee Counter part Fund を設け それを土地基盤整備 建築等の促進にあ

ててはどうか？

(肥料のみで \$15,687 @ Rs 61 \$ Rs 94122 となる)

② KR援助 Dewahuwa 関連物資中の農業機械 (Tiller

Thresher, Pump) については 計画地区 (上流) のみでな

く 中流 下流を含む全 Dewahuwa Colony に分与し

(分与方式は下記) 残る分は適当に処分して 上記①の肥

料にあわせて Dewahuwa 関係現地通貨として活用されて

はどうか？ (Thresher Pump は全部分与するとして

Tiller 110 セットを処分すれば @ \$ 700 × 110 =

\$ 77000 @ Rs 61 \$ Rs 412000 となる.)

KR援助農業機械の分与方式 (案)

機 種	上流地区	中流地区	下流地区	計
Tiller	30	30	30	90
Thresher	20	20	20	60
Pump	10	10	10	30

KR援助農業機械の Dewahuwa Colony 全体への分与が行

われるとした場合でも それは無償交付であってはならず

Colonists が機械代金の20%に相当する頭金を各地区協同組合に預けることを条件とし、残金支払完了(1971-72-73-74年と残る4年間に1/5ずつ分割払いで完済する)時までは、各地区協同組合の責任で *Colonists* の *Joint Farming* 用として使用せしめる。

- ④ 上記③の機械代金の20%に相当する貯蓄は1970年 *Yala* の耕作の結果生ずる収穫中から行なう。そのため70年 *Yala* 耕作は従前の *Bethma* 方式(灌漑総面積を地区 *Colonists* の頭数でわり *Colonist* /人当り耕作面積とし、それを各人が自ら耕作するなり、その耕作権を1エーカー $\text{Rs} 100$ で他に転売する)によらず、より合理的な *Bin-Ande Bethman* = 新造語 = すなわち耕作地区を上流のみ限定し(中・下流は今 *Yala* 期において幹線水路の *desilting* が行なわれるので實際上給水できない。上流地区の *desilting* は *Maha* 水止め時(3月8日)から *Yala* 給水時(5月10日)までの間に実施可能)そこでは上流 *Colonists* のみが *Yala* 耕作の全労働・全投資を行ない

その収穫量の25% (シンハラ慣用語でいう *Bin - Ande* すなわち “半分の半分”) を中・下流 *Colonists* 分として提供する。これは中流 *Colonist* 分と下流 *Colonist* 分に分割してそれぞれの協同組合に預託する。上流 *Colonist* も自己の取前 (75%) 中より中・下流 *Colonists* と同率の組合預託を行なう。

⑤ 上記③乃至④の算定基準以下の如し

a KR援助農業機械価格の20%に相当する金額

(日本政府表示額)

<i>Two Wheel Tractor</i>	\$ 96 000
<i>-do- Attachment</i>	30.780
	<hr/>
	\$ 126 780
<i>Parts etc 10%</i>	12.678
	<hr/>
	\$ 139.458

$\$139458 \div 200 = \697.000 概算 $\$700.-$

Tow Wheel Tractor $\$700 \times 90 = \63000

Thresher (60)	\$ 10.800	
~do- Parts, etc 10%	1.080	\$ 11.880
Pump (30)	\$ 20.850	
~do- Parts, etc 2%	417	\$ 21.267
		<u>\$ 96.147</u>

\$ 96.147 @ Rs 61 \$ Rs 576.882

Rs 576.882 × 20% = Rs 115.376

b 70年 Yala Bin. Aude Bethma による貯蓄額

予定灌漑面積 700エーカー エーカー当り総収量 45ブッシェル

46ブッシェル × 700 (エーカー) = 31500ブッシェル

Rs 14 × 31.500 (ブッシェル) = Rs 441.000

Rs 441.000 × 25% = Rs 110.250

中流向 Rs 55.185

下流向 Rs 55.125

Rs 441.000 - Rs 110.250 = Rs 330.750

Rs 330.750 - Rs 55.125 = Rs 275.625 (上流向)

全 Colony 貯蓄額 Rs 55.125 × 3 = Rs 165.375

C. 両者相殺の可能性

70年 Yala 収穫からの貯蓄額 = Rs 165,375

KR 援助農業機械価格の 20% = Rs 115,376

Rs 49,999

概算 Rs 50,000

Colony 全体で Rs 50,000 (上・中・下流各地区で Rs 16,700 平均) にのほる余剰は、組合貯金としてすえおくか 希望によっては現金または現物で各地区の Colonists に還元される。

3 以上 5 点よりなる当方の示唆に対する Project Director.

Mr. Gamunulrugapalle の反応は “財政的な心配は無用である。計画内容さえ固まれば必要な資金は入手できる” の一点張り 但し “KR 援助物資の活用方針や 70 年 Yala を Bin-Ande Bethma で実施させてはという日本人専門家の構想は面白い。その具体的な実施計画を 3 月 11 日の Anuradhapura 会議で提起して貰いたい” というものであった。

もつとも、この会議を通じて *Gammilbrigäpölle* は KR
物資は *Coimferpart Fund* としても使用できるものであるこ
とを承知した。

土地基盤整備・建築	営 農	組 織
		70年 Yala に臨む農協の特別対策が検討された。
<p>昭和45年4月</p> <p><かんがい・排水></p> <p>4月7日セ側担当省局の Director クラスの Meeting で 1970年 Yala 予算が承認されたというが、4月末になっても実現されず、そのため道路補修 Paddy Dilot Farm 工事は Waiting の状態。</p> <p>地下水調査が Irrigation Dept の Underground Section の手で実施されたが Upland Irrigation および Domestic water の水源を Upland の井戸に求めることは困難であることがハッキリした。</p>	<p>昭和45年4月</p> <p>計画地域の米稲収穫作業は4月13日-15日のシンハラ正月のため中断され、またしばしばの雨で遅れ勝ち、シンハラ正月までに調整にこぎつけた農家はきわめて少ない。ために商人への青田売りが出た。</p> <p>収量は Observation Farm の1部収量調査から前年比30%以上の増収と思われる。計画地域内の70年 Yala 営農計画をセ側に提出した。</p>	<p>昭和45年4月</p> <p>農協と耕作委にたいして69-70年 Maha 完結と70年 Yala 実施をめぐる啓蒙を主とした組織経営活動上の指導を行なう。</p> <p>農協については農民に対し Maha 産物販売代金の組合貯金をすすめるため Maha 収穫期に入った4月10日に Anuradhapura 県知事を招いて組合貯金預入式を挙行した。収集荷は収穫脱穀調整のオフレで4月中には1000トン程度におわった。耕作委は4月3日全 Colony の委員を集め70年 Yala 耕作につい</p>

土地基盤整備 建築	管 農	組 織																								
		<p>ての water meeting を開いた。</p> <p>隣組集会は第1周最終回を終え、第2周第1回を開催後は、Maha刈取り Upland Crop 植付け等で農繁期に入ったため、一時中止。5月に入ってから再開することにする。月間延参加人員は男45、女15、子供45であった。</p>																								
<p>昭和45年5月</p> <p><建 築></p> <p>合同宿舍徐々に完成に向う。5月末までに Genovater からの送電線室内配線が殆んど施工済。飲料水用タソクも丘山にブロック、コンクリートで建上り Pump からの配管をほぼ完成した。</p> <p>Supporting-Staff 用宿</p>	<p>昭和45年5月</p> <p>1969-70年 Maha 水稻作は Observation Farm での収量調査ならびにセ側 G0 調査等を総合すると</p> <p>移植田 = エーカー当り 68 フンシエル</p> <p>撒播田 = エーカー当り 55 フンシエル</p> <p>総平均 54 フンシエル</p>	<p>昭和45年5月</p> <p>69-70年 Maha 期耕作における農協と耕作委の活動</p> <table border="1" data-bbox="1029 1411 1412 1881"> <tr> <td>1968-69</td> <td>1969-70</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>760 エカ</td> <td>772 エカ</td> <td>315 "</td> <td>1487 CWT</td> <td>977 エカ</td> <td>RS 61125</td> </tr> <tr> <td>245 "</td> <td>256 CWT</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>RS 18250</td> </tr> <tr> <td>水稻耕作面積</td> <td>移植面積</td> <td>施肥量</td> <td>改良種子使用田</td> <td>耕作資金融資</td> <td></td> </tr> </table>	1968-69	1969-70					760 エカ	772 エカ	315 "	1487 CWT	977 エカ	RS 61125	245 "	256 CWT				RS 18250	水稻耕作面積	移植面積	施肥量	改良種子使用田	耕作資金融資	
1968-69	1969-70																									
760 エカ	772 エカ	315 "	1487 CWT	977 エカ	RS 61125																					
245 "	256 CWT				RS 18250																					
水稻耕作面積	移植面積	施肥量	改良種子使用田	耕作資金融資																						

土地基盤整備 建築	営 農	組 織
<p>舎3戸(1戸4人収容)も骨組と屋根が施工に入る<かんがい 排水></p> <p>70年Yala耕作は4月3日のWater Meetingで580エーカーと決ったがその後の降雨でTankがSpillする状態となったことから、200エーカー増して5/3エーカー×465ア=775エーカーをかんがい面積とすることになった。</p> <p>5月18日に給水を開始したが5月末現在で50%が初回耕起を終えた程度でWater wastageがかなり出ている。</p> <p>5月16日の農業省での会議で道路補修その他今年度の予算が出なかったのは手続上の問題であったので早急に手配す</p>	<p>Maha水稻収穫調整がおくれたため5月5日からのYala耕作向け放水予定が18日に延期された。ただしTank溝水でYalaかんがい面積をTract5で増やすことになる。水田でのSubsidiary food crops Vegetableの試作は100エーカーの予定を15エーカーに縮小。</p> <p>水稻のRow Seedingは立消えとなる。</p>	<p>耕作委 Colonization Olticon 農協役員等を通ずる啓蒙宣伝で移植 撒播率は昨年の32.68から41.59に改善された。施肥量は58倍増え 同じく農協供給の改良種子も在来種・改良種比率でみると昨年の87:13が今年度は49.51と逆転した。農協による耕作資金供給額は昨年の34倍となっている。</p> <p>なお1969年8月→12月までの地区農協による購買品取扱額は政府配給物資を含めて週平均Rs1114にとどまっていたが Dewakuwaの計画が開始された69年11月からは急速に伸びはじめ70年4月にはRs3041と27倍にな</p>

土地基盤整備 建築	営 農	組 織
<p>る旨 Irrigation Dept からの発言があったが 5月27日の第7回総選挙で政権交代したため、その執行は新政権待ちの状況。</p>		<p>った。この間政府の配給物資の量や単価に変化はなかった。この取扱額の増加は組合抜きの生活物資が増えたことを意味する。その増大率は、</p> <p>11月から2月までは毎月約15%、2月から3月さらに3月から4月にかけては、それぞれ前月比40% 50%ののびを示した。</p> <p>反面 5月末までの組合員の組合への収持込みは 推定総収量の17%弱に止ったことや、同時点における Maha耕作資金の返済率が60%。また組合貯金も Rs 2001 とまりということは、組合自体の再建整備は一応路線にのったものの、これをさらに確実なものにする</p>

土地基盤整備 建築	管 農	組 織
		<p>る努力を通じて 組合員 一般の組合にたいする信 頼感を高める一方 生産 そのものを組合の音頭取 りで組織化していく必要 を物語っている。</p>

第2期：昭和45年6月 → 昭和45年10月18日

この時期は、バンダラナイケ政府発足から、*Dewapura* 協定調印までの4ヵ月に当る。前にふれたように *Dewapura* 計画はこの期間には一種の“宙ぶらりん”の状態におかれていたと言える。日本人専門家としても積極的に活動できなかった時期である。

1) 総選挙の結果、セナナヤケ氏の統一国民党 (*United National Party*) 政府にかわって、セイロン自由党 (*Sri Lanka Freedom Party*)、セイロン平等党 (*Lanka Sama Samaja Party*)、セイロン共産党 (*Communist Party of Ceylon*) の3党連立内閣が登場し、6月14日に *Election Manifest a Carbon Copy* であるかのような *Throne Speech* が発表された。新聞その他は、前政権が手がけてきたものは (すでに外国と締結した協定にもとづいて実施中の開発計画を含めて) 一時ストップがかけられ、あらためて審査されたうえで中止か継続かが決定される方針を当政府はとるであろうと報

びた。

2) *Dewahuwa Project* の具体的な取扱いについて、セ側の窓口である農業省 *Gawini Iniyelole* 氏 (*Project Director*) に尋ねてみても、故意にさけているのか、要領をえぬままに日時が経過しているうちに、6月23日になって組織担当の佐々木専門家名差しで、“追って沙汰あるまで *Colombo* 市内を離れぬよう、との禁足令が *Project Director* (*Mr. Gamini Imisapole*) から文書で出された。この禁足令は佐々木個人のみに対するものか、あるいはそれまでも日本人専門家団の *spokesman* 的存在であったことから名宛は佐々木個人になっていても、*Colombo* 市内を離れぬようにとの通達は他の又名の専門家のためのものであるのか、といった解釈上の問題があったほか、その意味もとりようでは明暗両様で、もし明ならば新政権は *Dewahuwa Project* にたいして前向き姿勢で近々に本計画について新大臣その他からの緊急質問に応えるよう専門家を足止めさせるという風にとれるが、暗

転すればそれは撤収命令の前ぶれであるかも知れぬからであつた。

しかし現地大使館は、"今までどおり対セ姿勢は前向き。"と言明し、6月23日来セの外務省南西アジア課長も

"*Dewahuwa project*"は、あるいはセ側の都合で若干遅れることがあつても、実現の方向で事務折衝を続ける予定。との説明があつた。

日本人専門家 *Team* も、以上を勘案しつつも、セ側を不必要に刺戟することを避け、3人とも基地を *Colombo* に移して、佐藤、堀江両専門家による月2回程度の現場訪問により、第1期中につくり出された開発実績の逆戻りをチェックすることに決定した。

3) これより先、5月中旬の時矣で、第7回の総選挙の結果いかなる政権が登場するにしても、それに対し本計画趣旨の再確認を求め、かつ今後の計画の進め方につき *Time Schedule* にのつとつた具体的な事業内容を示すことにより、予算、人、現地資材等の手当てをかちとるべきで

あるとの結論から、第2次調査団が作成した *Feasibility Report* の基本線を、第1期における至験に照らして、今後の具体的事業計画 (*Implementation Programme*) をたててセ側に提出すべく、各専門家が担当部門の細目計画につき作業を開始していた。

4) 7月に入るや 大使館(中村書記官)は、3専門家の意志を参考にしなから、農業省 *Permanent Secy*, *Mr. Mahinda Silva* と *Agreement* 交渉を再開、*joint Comt Project Director* と *Project Manager* との関係等、2、3項目を残すのみで合意に達した。一方カンガイ省の *Additional Permanent Secy Mr. M. S. Perera* (もと農業局長) や *Mahaweli Development Board Chairman: Mr. Manamperi* あたりから、*Dewahawa Project* に関心ある旨の非公式な発言があるなどし、本計画のセ側担当省が農業省からカンガイ省 *Mahaweli Development Board* に移る可能性も皆無下ないと思わせた。また8月には本 *Project* がその管割内に入る

Anurādhapura の Government Agent, Mr. A. B. P. Maramperi や、かんがい局 Deputy Director の Mr. Cook あたりによる Dewahuwa 視察が相継ぎ、いよいよ側が本計画について肯定的な態度に踏み切ったことが感じとられた。

5) かかる情勢にかんがみ、3 専門家は 5 月以来作業してきた Dewahuwa Community Development Project Implementation Programme は今や協定締結を側面的に押し進める道具として役立たせるとともに、調印後の Dewahuwa Project を第 1 期におけるが如き諸困難から自由にするため、8 月に入って各専門家ともその担当部門の具体的計画案を脱稿し、その編集、英訳を Colombo 籠城の佐々木専門家に一任した。佐藤、堀江両専門家は、6 月末から 7 月初めにかけて (6 月 29 日 → 7 月 1 日) の 3 日間出張を皮切りに、7 月中 2 回、8 月中 2 回と、前後 5 回現場を訪ね、Maha 観察田の Sample 調査、

Yala 観察田の設置等 (佐藤)、合同宿舎建築建築、用水

系統及び減水深調査. Tankwater の Rotation かんが
い. 流水堰設置等 (堀江) を実施すると共に、組織関係の
情報蒐集を行なった。

- 6) 9月に入るや、5月中旬以来作業中であつた Dewahuwa
Community Development Project Implementation
Programme が、大使館側の印刷、製本面下の協力をえて
5日に完成、早速関係各省 局、組織に配布され、検討さ
れる手筈がととのつた。また又5日に至り、Settlement
Planning & Development Board (のちに Settlement
Board と改称) の Sub-Committee on Youth Settlement
& Life Improvement Project の Chairman : Mr. Amit
(Additional land Commissioner) より佐々木専門家
宛に同上 Sub-Committee が Dewahuwa Project を
取扱うことになり、9月又7日午後2時より会合をもつ
て出席されたい旨の公文が日本大使館気付で送付されてき
た。この会議には3専門家揃って出席し、Chairman か
らの質問に答えて、佐々木専門家が代つて本計画にかんす

る詳細な説明を行ない、第ノ期における諸困難とその原因、理由にも言及して、今後かかる渋滞をさけるためセ側において十分な措置が望ましい旨を言明するとともに、日本人専門家 Team としては、かかる Policy Matter にかんする検討には Agreement にある Joint Comunittee の開催が必要であろうとの見解を明らかにした。

- ク) また、Dewahuwa 計画の今後を、総選挙以来、帰趨を定めがたいセイロン国の政治、経済動向のなかに探る意味で、3 専門家による情勢分析が続けられ、その中間報告として、佐藤専門家からは“デワフワに関する最近情勢”、佐々木専門家からは“最近におけるセイロンの政治経済事情にかんする報告書”（1. はしがき 2 独立以降の推移：(1)国家的統合 — 問題の所在と複雑さ）の2篇が、9 月23 日付で O T C A に送られている。9 月中、佐藤、堀江両氏は 17 日～19 日にかけて Dewahuwa 現場を訪ね、それぞれ Yala 観察田の収量調査、用水情況視察
- Infrastroncture 関係の今後の Programming に当った。

8) 10月に入ると はじめ10月10日と伝えられた協定
調印にそなえて 3 専門家は Dewahuwa の現地に残留し
ていたセ側 Counterpart や Supporting - Staff を
Colombo に招致して、すでに開始されていた1970~
71年 Maha への具体的計画を論じたり、そのための佐
藤 堀江両氏による現場訪問を行なうなど 動きを活発化
した。結局 Dewahuwa Project にかんする Agreement
は10月19日に調印され、同日午後には差迫った、とい
うより既に開始されていた1970-71年 Maha 期に
計画的な体制で臨まんとする日本人専門家の農業省訪問に
対し、セ側は "Dewahuwa 計画のセイロン側機構を整備
するため10日間の時間的余裕が望ましく、その間日本人
専門家の現場活動は遠慮されたい。10月30日以降
Project Director 就任予定の Mr. Amir と相談あり度
し" と挨拶した。したがって10月19日調印された
Dewahuwa 協定にもとづく具体的な活動は、10月31
日の会談をもって開始されることになった。

なお、昭和45年6月から同年10月までの5ヶ月間にわたる Dewahuwa の現場の実情をかいつまんで報告すれば、次のとおりになる。

I : 土地基盤整備・建築関係

(1) 建築

合同宿舎は窓ガラス、電気配線 備付けダンス等の室内工事とあわせて6月中にほぼ完了、7月に入って終了。構内の整地作業も8月上旬には終り、同月中に発電室、電灯配線工事が完了、10月末現在で入居のためには Generator, 最少限度の家具・備品、Kitchen, Dining Room のためのミニマム施設が具備される必要を残すのみとなった。

(2) かんがい 排水

Yala (1970年) 作は政変と関係なく進行し、5月17日 → 9月9日放水、6月一杯で耕起、代掻きを完了、播種を7月始めにはおわった。Yala 作開始まえの全 Colony Water Meeting において、日本人専門家

による次の Maha を早く始められるよう、Yala の終りに次期 Maha 代掻き用水程度は残す心算で、タンクの水を目一杯つかうような耕作面積にしないほうがよからう。との示唆が受け入れられたことは喜ばしい。

II: 学農関係

Project Director から禁足令が出されたことを考え合せ、現地住み込みをやめて、Colombo 基地から月2回の割で出張するというやり方で Dewāhuwa 下の 69-70 年 Maha 期観察田収穫物調査、7970 年 Yala 期観察田設置、生育観察を行なうとともに、現地に残留の Agriculture Officer, Agriculture Instructor, Extension Worker との接解を保ってきた。

1970 年 Yala 作は、計画対象地域 (Colony の上流部分) における全 Colony Bethma 方式で行われ、各入植者は 1.66 エーカーづつの水田を割当てられ、大部分が撒播であった。施肥田は 20% 程度。合計 10 エーカーで Tomato, Red Onion 等が栽培された。観

察田下の収量から推算して、水稻については一応目標とされたエーカー当たりのブッシェル前後はとれた模様。

Tomato は栽培期の遅延、有機質肥料欠乏で失敗。Red Onion と Red Beet は相当の作柄を示した。

III: 組織関係

6月23日 Project Director から禁足令をうけたので、日本大使館とも相談のうえ、新政権の対 Dewahwa 計画態度が確定するまでは、組織問題で刺戟的な動きはつつしむ方がよいと判断し、6月16日-18日を最後に現場を離れ、佐藤、堀江両専門家が現地を訪問するとき組織関係の情報をあつめてもらい、それをもとにして組織担当のセ側 Supporting Staff を通じて“間接指導”するにとどめた。

(1) 農業協同組合

第1期からの宿題とされてきた (i) 69-70年 Maha 期水稻耕作資金の返済 (ii) 同期産物の組合集荷 (iii) 組合貯金と未払出資金の支払、の3件について

は、次のような実績であった。

(i) 耕作資金の返済

8月末までに返済された69-70年Maha耕作資金はRs 47,000で、貸出総額の77%となった。

(ii) 同期産物の組合集荷

8月末までに9,000ブッシェルとなり、計画地域での推定販売余剰30,000ブッシェルの30%とま
り。組合集荷目標の15,000ブッシェルと比べれば
60%の低成績である。その理由としては、昭和45
年5月分月例業務報告書でのべたGPS価格引上げ待
ちのほか、それ以上直接的な理由として、政府の集糶
資金 (People's Bank 手当) の不足と、GPS Store
(政府米倉庫) の貯蔵余地がなかったことがあげられ
る。

(iii) 組合貯金 未払出資金

4月10日、知事を招待しての預金式当日のRs 105/-
に、その後Rs 95が追加されたのみで、8月末で組

合貯金の合計は Rs 20.0 にとどまった。但し、未払
出資金のほうは Rs 1,000/- の払込みがあった。

、農協関係の朗報としては Dewahuwa Project 第
1期が開始されてから地区農協の利益金が大巾に増加
したことで、

1967-68年度、 欠損、

1968-69 " Rs 560 の純益

1969-70 " Rs 6,700 の純益

の結果が下た。

(注: 協組の会計年度は10月→9月である)

(2) 稲作委員会

6-7月には計画対象地区(上流部分)で全 Colony
の Bethma 方式による Yala 耕作が行われ、またそ
れは Highland における煙草耕作の最盛期に当た
たが、今期 Yala 作は、上流農家のほか中、下流から
の Colonist ならびに耕作シェアを金で買収した
有力 Colonist に雇われた農業労働者によって行われ

たため、特に上流耕作委員会独自の活動余地はなかった。

1970-71年 *Maha* 耕作の手順については、9月3日、日本人専門家不在のまま、全 *Colony Water Meeting* (耕作委員会を中心とした農民大会) が開催された。

(3) 青年組織

2月12日に結成された男子青年組織は、1970-71年 *Maha* 期に予定されていた本格的な *Joint-Farming* にさいしてトラクター運転手ならびに運営記録係りとして、生産的な仕事に従事できる夢をいただいていたが、3月中旬に陸揚げされた *Kennedy Round Assistance Programme* による *Hand Tractor* の *Dewahuma* 向け支給が行われなかったため、その実習訓練も行われず終りであった。それに組織担当日本人専門家が現場から離れていたこともあって、意気あがらぬ実状にあった。

(4) 地区農民教育、隣組集会

これまたさきの総選挙後、現場からの日本人専門家の引き揚げでストップ。

なお、組紘担当日本人専門家の *Counterpart Officer* で、*Co-Manager* を兼ねていた *Mr. Rajapakse* は7月4日付で解任され、その後任は発令されておらず、営農 *Counterpart* の *Badagoda* 氏が *Co-Manager* 代理をつとめている。

第3期：昭和45年10月19日 → 現在に至る

昭和45年10月、11月、12月 並びに昭和46年1月の月例業務報告書をみられたい。

